

トンガ・ババウ諸島における環境と工芸



総合人間学部 2年
今井 惇
トンガ
2016年8月16日～
2016年9月7日

渡航概要と内容

トンガ王国は、南太平洋に浮かぶいくつかのやや大きな島とたくさんの小さな島から成る島国です。この国に住む人々のほとんどはポリネシア系で、体が大きく親切ですが、すこし怠惰なところがあります。今回の私の渡航目的は、パンダナスという非常に硬くて大きい木の葉を編んだ籠や受け皿(日本の藁編みに近い)や木の内皮を叩きのぼして布にした Tapa と呼ばれる樹皮布と、その他の木彫りなど、この国の工芸全般に関して、でした。これらについて特別な発見をするには至らなかったため、滞在した島ごとに、調査に直接は関係ないことも含めて報告していきたいと思います。

Tongatapu 島(8/17-8/22)

首都があるこの島には、目的地である Vava'u 諸島に行くまでの準備と自分をトンガという国に慣れさせることもかねて数日間滞在しました。初めての環境に最初の内は戸惑い、せっかくの南の島なのに連日の雨であったことや到着二日目には詐欺師に声をかけられたことなども手伝って心細い日々が続きました。後から振り返るとこの期間における印象的な出来事は、その多くが国内線に乗るために訪れた Fua'amotu 空港が舞台となっていました。8/20にこの空港に来た時には、'Eua という Tongatapu のすぐ近くの島でボランティア活動をしている JICA の方と偶然お会いし、すこしお話しすることが出来ました。また、その後不幸にも、自分が乗る予定の便が欠航になってしまい、その翌日はトンガではほとんどのビジネスが営業しない安息日の日曜日であったこともあり、かなり落ち込みました。しかしながら、そんな私を見て空港にいた他の人たちは慰めてくれたり、なぜか謝ってくれたりして、街まで帰るために使ったタクシーの運転手も状況を聞いて、道中ずっ

と慰めてくれたり宿の心配をしてくれたりしてくれました。この時はじめて、トンガ人のフレンドリーさを直に感じられたような気がして、人知れず嬉しくなっていたことを覚えています。次に空港を訪れたのは、代わりの便が用意された二日後でした。この時、一人のアジア人らしい見た目の中年男性に話しかけられました。結果として、このことが今回の渡航での最大の幸運であったと思います。彼は日系アメリカ人の、美術系の大学教授でした。私が携わっている人類学という学問について彼は批判的でしたが、私が学部生なのに一人で辺鄙なところまで調査旅行をしに来ていることや Vava'u 諸島で調査しようとしていることがかなり共通していたことから、私のことを気に入ってくれたようでした。同じ飛行機に乗って Vava'u 諸島に着いた後は、お互いの宿と滞在日程を確認して、多分また会うでしょう、というような気楽な再開の予定をたてて別れました。

Vava'u 諸島(8/22-8/30)

8/22 はこの島についてからも、大きな出来事がある盛りだくさんな日でした。一度ゲストハウスに荷物を置いてから、この島の中心地 Neiafu をぶらぶらしてから宿に戻るとかなり体格の良いトンガ人男性が数人で料理をしていて、そのうちの一人が私に声をかけてきました。彼の様子が普通ではなく、何を言っているのかわからない上に軽く小突かれたりしたので少し怖かったです。他の人に仲裁に入ってもらいなんとかやりすごしました。それからしばらく鍵を締めた部屋の中で静かに過ごしていると、不意にドアを滅茶苦茶にノックされ叩き破られてしまいました。この時ばかりは命の危険を感じて身構えました。ですが、ドアを開けても彼は特に何をやるわけでもなさそうで、駆けつけた彼のお兄さんにお説教をされどこかに行ってしまいました。そのお兄さんは謝ってくれ、話してみると彼ら二人はこの島まで出稼ぎに来ていて、その翌日には地元に戻るそうで、その日はパーティーをしたい、というようなことを言っていました。支払いが自分なのか彼なのか分からないまま西洋人で賑わうレストランに行き、ピザを食べ、結局料金は彼が支払ってくれました。翌日にはこの兄弟が本当に去っていくのを見送りました。

この Vava'u 諸島は、複雑な入り江の形から絶対に安全なヨットハーバーが確保できることと世界有数のザトウクジラ接近ポイントであることで知られ、多くの西洋人旅行客が訪れます。このことがこの島の工芸に変容をもたらしているように私の目には映りました。来るだけ来てみて何のアポイントももっていなかった私は、ひとまず市場やハンディクラフトセンターにおもむいて、工芸品づくりに携わっている人たちと顔見知りになり、その作り方を教えてもらおうと思いましたが、Neiafu で働くトンガ人達は皆、"discount"や"the best price for you"という言葉の口にしながらか何か商品を買おうとしてきて、今日は買うつもりがないことが分かるとあまり相手にしてくれなくなりました。そのため、作り方をちょっと見せてもらおうと思っても、良い顔をしてくれる人はあまりおらず、Vava'u にいる間は市場には通い続けましたが大した収穫はあげられませんでした。また、市場以外で工芸を作っている人を探そうと思い徒歩で街の外を方々歩き回っ

て、タパ作りやパンダナス編みをしている人をうまく発見することは出来ませんでした。しかし、一人の青年と出会いました。彼は、滞在中に出会ったトンガ人のなかでただひとり、自分は貧しい、と私に告げてきた人物でした。私が歩き回っているときに呼び止めてきた彼は、音楽を楽しむためにどうしても携帯のSIMカードが欲しいのだと訴えてきました。私がすこし戸惑った後、お金はあげられないと伝えると、彼は家の中や調理中のタロイモなどを見せてくれた上、私を林に連れてきてヤシの木に登って目の前でココナッツを取ってみせてくれました。ここまでしてくれて何も返さないのも申し訳なく思い、自分のなかの正解が見つけれないままにお金をいくらか渡しました。彼とはその後も何度かぼったりと出会いました。彼はいつもどこか同情を誘うような話し方をしてくれて、そんな口調は他のトンガ人には決して見られなかったのも、私は彼に会うといつも少し悲しくなったのを覚えています。

前述した日系アメリカ人の大学教授とももちろん再会しました。彼の名前は Yoshimi Hayashi と言います。彼と私は、私の滞在の後半の数日間の昼から夜までの時間をずっとともにしました。トンガや Vava'u の話をしながら、南太平洋地域やポリネシア全域のことを教えてくれて、旅先での時間やお金の使い方、彼なりのフィールドワークのやり方も英語と日本語で教授してくれ（彼は英語話者ですが日本語も会話はできます）、アメリカ人の感覚で私の進路の相談にも乗ってくれました。彼はまさにトンガにおける私の先生でした。英語での込みいった議論がまだ出来ない私にとって、彼以上に自分のためになる出会いのケースがどれだけあるだろうと想像するたびに、自分の幸運が身にしみます。彼とは連絡先を交換し、いまでも何通かメールのやり取りをしています。やはり彼は芸術の人でした。帰国後に送られてきたメールに添付されていた写真には、本来パンダナスで作るトンガの伝統的な腰巻衣装 Ta'ovala を、彼は四角いインスタント麺の組み合わせで新たに作っていました。示唆的に中国系の商店に搾取されているうえに（トンガの商店のほとんどはトンガ人が働いていようと中国人が働いていようと中国人経営でした）、伝統を忘れ去ろうとしてしまっているトンガ人の現状を表現していたのだと思います。同じ景色を見ていたはずなのに、彼の目に映っていたものの異様さに、形容しがたいショックを感じました。

こんな幸運な出会いをすることができた Vava'u 諸島ですが、上記した通り工芸の調査については思った通りに行かず、Hayashi 氏がその作品で表現したように、若者どころか今では子供がいるような世代までもパンダナスの編み物の作り方を知らなくなっていつてしまっているのが現状でした。'Eua 島では盛んに Tapa 作りが行われていると聞いていたことや、薄々とトンガは自分の生涯をささげるフィールドにはならないことが感じられていたので、今回の渡



航をやや広域を調べる予備調査的なものにするのを勝手に決心し、Vava'uの滞在日数を削って'Euaに三日間ほど滞在することにしました。

'Eua 島(8/30-9/2)

見たこともなかったような小さなプロペラ機に乗って、Tongatapuの南東にある'Euaに行きました。今まで見たトンガの島々の中でも、最も田舎で、最も「フレンドリーアイランド」たるトンガとトンガ人の姿が残っていた島だったように思います。専門のタクシードライバーさえいないことに最初は驚きました。ですが、その代わりに島を端から端までつなぐ唯一のメインストリートをとボトボ歩いていてと車が止まり、声をかけてくれる受動的なヒッチハイクの機会が何度もありました。軽トラックの荷台に乗るという一度はしてみたかった経験もすることが出来ました。

そしてこの島では、Hiapoと呼ばれる木の内皮を叩いて伸ばし何枚も重ねた上で模様をつける、Tapa作りを簡単に見ることができました。メインストリートを歩いていたときに、コーンコーンという音が様々な家から聞こえてきていることに気がつき、その音につられてとある家を覗いてみると、それこそまさしく皮を叩いて伸ばしている音だったので、TongatapuとVava'uでもそれなりの距離を自分の足で歩いて探し回った自覚があっただけに、それまでずっと探し続けていたものが、場所を変えるだけで簡単に見つかったことはやはり驚きました。その家の女性は私を歓迎してくれて、短い時間ではありますが、iron treeと呼ばれるマツ科の植物から作った台と槌で内皮を叩く作業を説明しながらみせてくれました。近くで聞くと、耳が痺れるほどの大音量だったのでよく覚えています。

また、空港で会った青年海外協力隊の方のうちの一人とも再会することができました。その方は'Euaで唯一の病院で看護師をされていました。すこし後の話ですけれど、Tongatapuに戻ってからも、なんとあのVava'u初日に出会った兄弟とも偶然再会し、こんなことがある度にトンガがとても小さな国であることを感じました。

私はこの'Euaで、一つのロマンティックな疑問をいただきました。それは、見た目が明らかにポリネシア系ではない現地人が生活しているが、彼らは何者なのだろうかというものです。彼らの多くは森の中など、追いやられるように外れのように住んでいて、私が見たのはほとんどが老人でした。英語はまったく話さず、西洋人のような彫りの深さがありました。彼らについての空想をすることが学問的であるか、私には分かりません。しかし、それは太平洋地域に残るラプタ人の伝説や大航海時代の様々な歴史と自分の中で共鳴し、とてもおもしろいものでした。



Tongatapu 島(9/2-9/6)

帰国に備えて Tongatapu に戻ってきてからは Hayashi 氏に紹介された宿に宿泊しました。けっしてリゾートなどではありませんが、ビーチに近い上、それまでの安宿に比べるとはるかに清潔で設備もよかったのが、こんな贅沢な思いをして良いものかと不安になりました。美しい海を眺めて潰すにも一日は長かったことと、Hayashi 氏の影響もあって、自分も観察するだけでなく手を動かして何かをやってみたくなったことから、ビーチに落ちていたココナッツを自分の手で削って、中身の胚乳(ココナッツミルクやココナッツウォーターになる部分)を取り出そうとしてみました。そこには、ポリネシア地域では西洋人がやってくるまで金属が使われていなかったという知識も絡んでいたもので、あたりに落ちているもので何とかココナッツを削ろうと試行錯誤しました。しかし、貝殻や火山性またはサンゴ由来の石ころではせいぜい表面をなぞる程度の傷しかつけられず、諦めて持参した携帯型のナイフを使って再挑戦しました。汗は噴き出し、白人の女の子には笑われながら、三時間くらいかけてなんとか最も硬い内殻までたどりつきます。その時にはナイフの刃もボロボロで内殻に傷もつけられず、手も痺れてタコもできていたので、若干の心残りを感じつつそこでやめました。ちなみに現地の男性たちはみんな山刀を持っていて、ココナッツウォーターを飲むときは端から綺麗に削り落としますし、犬や豚に餌としてやる時は掌の上で器用に真っ二つにしていました。

また、Vava'u での件があったので、あまり期待はせずに首都 Nuku'alofa の工芸市場も覗いてみたところ、Linna という名前の二十代くらいの女性が興味を持ってくれて、とても親切に私の質問に答えてくれました。彼女のおかげでパンダナスの内、最も一般的な Taola、より硬くて白い Kie、茶色い Paongo、黒い Tutuila の識別が出来るようになり、これが帰国直前でなければ、と思わずにはいられませんでした。これに限らず、トンガ国内を一周してまた Tongatapu の Nuku'alofa に帰ってきてみると、同じ町にいても自分が出来ることの範囲が非常に広がっていて、街を眺めるまなざしも変わっていました。知識と度胸がついたことがその理由だと思います。



渡航を通じて感じたこと

「おもろチャレンジ」の壮行会において、山極先生は渡航者へのスピーチとしてこんなことを言われました。「外国語なんか大して喋れなくてもなんとかなる。」この御言葉は、初めての海外で三週間一人、が間近にせまって臆病になっていた私の心をポジティブなも

のにしてくださった、非常にありがたいものでした。自分の経験に正直になるならば、私が痛感したのは、言葉、特に英語の力であったと言わざるを得ません。その理由の大部分は Vava'u で行動を共にした Hayashi 氏にあります。「人は情報を持っている」ということを自覚している彼は、とにかく身の回りの現地の人にも観光客にも話しかけ、本当に有用な情報を獲得していました。ある日の夕方 Hayashi 氏とレストランで話していた時には、彼が仲良くなった人たちが集まってきて 10 人超で宴のようになりました。この日は私も本当に楽しく、彼のスタイルが有効であるばかりでなく楽しめるものであることも理解しました。私がこのやり方を真似するのに必要なものの一つが積極性であることは間違いありませんが、当時の私の英語の技能では、相手が自然体で知っていることを話してくれるどころか、相手がわざわざ教えてくれていることさえ理解できないことがしばしばありました。フィールドワークするものの中でも私が身を投じている人類学は、人とダイレクトに対峙する学問です。その上で言葉の力は、最も、と言ってもよいほど重要であることは否定できません。また現地語の習得もその土地で誰とでも話すために重要であり精密な研究のために必要不可欠であることも間違いのないでしょう。それでも、いまの私にとっての、世界中のかなりの割合の人が習得することになっている英語という言語をまずは使いこなせるようになることの必要性、これを月並みながらも強く再確認しました。私は英語に関しては不良学生に近かったのですが、帰国後は少しずつ時間を割き始めています。

これに加えて、自分はまだ少しの間は「若者」という特権とエクスキューズが使えることも改めて知ることが出来たことと、同じ場所で同じものを見るときも知識や考えを持っているか否かで見えてくるものに差が出ることを再確認できたことも、今回の渡航では非常に大きな収穫になりました。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

経験をどう生かせるかは自分次第ですので断言するのは難しいですが、確実に今回の渡航で得られたものは、海外にひとりで行って色々なものを見て回ることにネガティブな抵抗感を全くもたなくなったマインドである、と思います。現にいま、行って自分の目で見て、感じてみたいところがたくさん浮かび上がってきてしまって、お金と時間の工面のことばかり考えています。

また、就職するのか研究職につくのかで悩み続けてきた自分が、「日本」という偏見に囚われていることも、Hayashi 氏は教えてくれました。自分の人生の大部分を捧げるものが何になるかはまだ分かりませんが、今回の渡航と彼が語ってくれたことが自分の今後の人生に大きな影響を与えることには確信をもっています。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *海外通信用 Wi-Fi
- *宿泊費
- *移動費
- *その他雑費 など

